

精神医学における診断体系と診断実践

オーガナイザー：石原孝二（東京大学・大学院総合文化研究科）

提題者：松本ちひろ（上智大学）

石原孝二（東京大学・大学院総合文化研究科）

糸川昌成（東京都医学総合研究所）

山田悠至（国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院、東京大学・大学院総合文化研究科）

企画趣旨

精神医学の診断体系と診断実践は、現在大きな転換点に立っている。精神障害（疾患）の分類に関しては、アメリカ精神医学会が作成している DSM (*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*) が臨床においても研究においても大きな影響を及ぼしてきた。しかし、DSM-5(2013)をめぐる論争などを通じて、DSM の影響力は陰りを見せ始めているように思われる。米国の国立精神保健研究所 (NIMH) は DSM (および ICD) の診断体系を見限り、研究のための新たな診断分類を作成するための大規模プロジェクト RDoC (Research Domain Criteria) を 2009 年に開始している。他方で WHO は 2019 年 5 月に国際疾病分類(ICD)の次期改定バージョン ICD-11 を決定する予定であり、最終ドラフトが 2018 年に発表された。ICD-11 をめぐっては、認知症の扱いをめぐって、各国の精神医学系学会からの意見を受けて変更されるということがあった。ICD-11 のドラフトをめぐる議論は、分類の基盤が不安定なものであることをうかがわせる。本ワークショップでは、精神障害（疾患）概念の再検討を行うとともに、精神医学における診断体系と診断実践を科学的な観点から検討することを試みることにしたい。